

突厥第二可汗国の遺民集団と安史の乱

齊藤茂雄

モンゴル高原のトルコ系遊牧国家である突厥第二可汗国（682-745）は、ウイグルなどの敵対するトルコ系遊牧集団によって滅ぼされ、その遺民集団はゴビ沙漠以南の草原地域に居住することとなった。その後、この遺民集団は騎馬軍事力として安祿山の集団に取り込まれ、安史の乱において重要な軍事力となったことが指摘されている。しかしながら、従来の研究では、突厥遺民をトルコ系遊牧集団として詳細に検討する段階までにはいたっていなかった。安史の乱ならびに、その影響によって激変したそれ以降の東部ユーラシア史を考察するためには、この作業は必須である。

そこで本発表では、突厥第二可汗国滅亡から安史の乱にいたるまでの突厥遺民集団を詳細に分析する。その際には、ウイグル可汗国によって759年頃に建設された古代トルコ語のシネウス碑文や、唐に帰順したトルコ系遊牧民が作成した漢語石刻碑文の記述も利用する。これらの記述は、漢籍史料には含まれていない個別具体的な記述を含んでいるからである。

突厥遺民集団は、突厥第一可汗国（552-630）の遺民や九姓鉄勒の集団などを含んでおり、「突厥遺民集団」と十把一絡げにとらえられない、多様な集団構成になっていた。また、その遺民集団のなかには、740年代後半に可汗を名乗る「左廂十二姓集団」も存在した。この集団は突厥第二可汗国最後の可汗、白眉可汗の残党であり、可汗の子である阿史那従礼を首長として安史軍に参加していたが、途中で離脱し、ウイグル可汗国の遠征軍に敗北している。

安史の乱の鎮圧には、ウイグル可汗国が唐側に立って援軍を送っていたことが知られているが、その目的のひとつはこの阿史那従礼集団を打倒し、ゴビ以南の地域を平定することにあった。唐代史における安史の乱の重要性は良く知られているが、トルコ系遊牧民族史の文脈においても、安史の乱は極めて重要な戦乱と見なせるのである。